

県立村上中等教育学校 (15期生)

●探究学習の到達点のひとつを確認しよう。

中間考査 7月13日 スタート!

探究活動の成果はプレゼンやポスターセッションで発表をします。それと同時に、その概要をまとめた「予稿集」を作成するのが通例です。今回はその一例を見てみましょう。なお、ダミー見本を作成することや、他の方の記事を利用することはひと手間ですので、今回は、お恥ずかしながら、水戸が以前作成したものをサンプルとして提示します(学会や研究分野により形式は異なりますが、一例としてみてください)。 (水戸)

【キーワード】

論文の最初にキーワードを書きます。読み手や聞き手はこれを見て、内容をおおざっぱに把握したり、学会で、参加する発表ブースを選ぶ手がかりとします。執筆者の腕の見せ所です。完成の前に考えます。

【はじめに】

なぜあなたが、その研究を始めたのかを簡潔にまとめます。理論と現実の矛盾点や疑問を書くといでしょう。



★今、できること★

今、まさにあなたが考えていることをまとめればよいです。総合で行っている活動のワークシートに、今、あなたが課題設定に苦労している姿を、記録するようにします。

【先行研究】

これまで、なんという名前の研究者がどんなことを述べているかを簡潔にまとめます。数名の意見を掲載したいところです。



★今、できること★

新聞、新書、資料集、講義動画のどれも「文献」として活用できます。特に新書読書では、気になるページに印をつけておきましょう。

日本人高校生に対する「チャンク」の認知的指導

水戸 直和 (新潟県立新潟中央高等学校)

キーワード: チャンキング, 知識の関連化, 言葉の創造的な産出

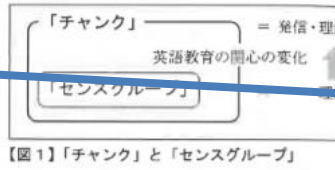
1. はじめに

高校でも音読中心の授業が盛んになり、「クイックリスポンス」は定番の活動である。あの英語を日本語訳と結びつけ、内在化させようとするもので、「チャンク読み」と併用されることが多い。ただ筆者も同様の活動を熱心に行なったものの、whatever mind to my came 的な不適切な英語を産出する生徒が存在する。たくさん話させれば十分とは必ずしも言えないのではないかと。——これが本実践の出発点である。

2. 先行研究

(1) チャンク・チャンキング・センスグループ

高校では、教語からなる英語のかたまりを「チャンク」または「チャンキング」と呼ぶことが多い。しかし先行研究から両者は異なり、かつ、かの「センスグループ」とも違うと言える。まず「チャンク」は「ややこしい」(土屋, 2004) 性質をつが、これこそがその特徴である。それは文字レベルから文レベル (Nation, 2001 を参考) と多種な形態を持ち、階層的である。また「センスグループ」は文法が基準で、形式的に「チャンク」の一種と言える。ただ (Michaels and Schmidt, 2010) である一方、「セ



【図1】「チャンク」と「センスグループ」

筆者の考えを端的にまとめます。また、かっこ内に著者の名前と文献の発行年号を明記します。

○参考文献の記載例

★このサンプル画像の出典を、記載するとこうなります!

水戸直和. 2013. 日本人高校生に対する「チャンク」の認知的指導. 北海道研究大会発表予稿集. 東京: 全国英語教育学会. 434-435
著者名 発行年 論文や記事のタイトル 書籍や雑誌名 出版元名と出版地 該当ページ

3. リサーチ・クエスチョン

そこで本実践では [A] 従来のような音読活動などを通じたチャンクの数を増加え、[B] チャンク間の接続部分(「チャンキング」)についても理解させ、さら運用する活動を導入することで、【1】生徒は英語を正しく配し、意味ある文を作れるようになるのか。【2】それによって willingness to communicate (WTC) を促すのか。【3】それぞれの活動の長所と短所は何か。以上の3点について検証するこ

論文の最後には「引用文献・参考文献」の項目があります。その文献のページも明記することが原則ですから、ただ読むだけでなく、ページもしっかりメモしておきましょう!

【リサーチ・クエスチョン(RQ)】

分野にもよりますが、多くの場合、あなたが追及したい課題を解決するべく、「疑問」をいくつかの疑問文にまとめます。

あなたのテーマ



●特集●

探究活動の「予稿集」を見てみよう

今、何ができるか。何をすべきか

●特集● 探究活動の「予稿集」を見てみよう

4. 指導対象と指導方法

対象生徒は高校1年生21名で、実質的な指導期間は2カ月（2012年10-11月）語Iの授業での実践であり、調査用紙やインタビューによる質的・量的調査とした。筆者の最終的な目標は speaking 能力の育成だが、本実践では output compete に限定し、調査用紙に書かれたデータをもとに検証した。授業は以下の活動から[活動1] ある語句に後続する語句を推測する活動。
[活動2] Data-Driven Learning (Hunston, 2002 を参考) を応用したチャンクとチャンキングについて認知的に学ぶ活動 (language awareness の高揚をねらう)。

●どのような語句が続くと考えられるか
1. He had to help /
2. There are two ways /
3. He is famous / () a man

(注意)
インターネット記事のコピペは厳禁!

仮にあなたが私のこの文章を引用する場合は、「水戸, 2013 によると」などという言い方をします。



5. 調査結果と考察

(1) 一連の指導サイクルについて
一連の実践の結果、【1】については量的に向上した様子が見られ、また、本実践が語を配置することに対する苦手意識を払しょくする一助となったことが判明した。次に【2】と【3】は量的調査より、生徒が知識を自分なりに言葉を創造的に用いようとする態度が育成された。
(2) 各活動についての課題点と実践
本実践の問題点としては、まず教師と学習者の双方が動けること（これが Data-Driven Learning の問題点と動が展開できる。次に、タスクの綿密な設計が必要である。このようにその気づきを表現させるかを緻密に立案・提示することが難しい。一方で「もう少し複雑な課題がよい」とも。また、本実践では独自の音読シートを導入したが、一番高い支持率を得た。これ1枚で語句の暗唱や語群整理について練習することができるためであろう。質的調査ワークシート（コラムナーリーディング用教材の類。左のシート（英文中の数か所に空所）」よりも、本音読シート

6. 結論と今後の課題

今回、本実践が生徒の言語操作能力と WTC の育成の一助となったことが伺えた。学習認知面と行動面への働きかけが功を奏したと思われる。特に母語を利用し、言語理解を促した点についてはその有効性を複数の研究者が指摘している。ただ我が国で業は英語で行うのが原則であるため、今後、本実践をどう位置付けるか検討が必要である。また今回は文字により教材を導入したが、音声を用いる Ellis & Gaies (1999) らの実践が同様に slash を用いた指導を行う韓国の実践などから改訂のヒントが得られそうである。

7. 引用文献

土屋澄男 (2004) 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』東京: 研究社。
Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: CUP.
Richard, J. C., & Schmidt, R. (2010). *Longman dictionary of language teaching & applied linguistics*. Essex: Pearson Education.
ARCLE 編集委員会 (2005) 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み』東京: 一歩出版。
米山朝二 (2011) 『新編英語教育指導法事典』東京: 研究社。
Hunston, S. (2002). *Corpora in applied linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ellis, R., & Gaies, S. (1999). *Impact grammar: Grammar through listening*. Hong Kong: Pearson Longman Asia ELT.

【調査の対象とその方法】

実験や調査をする場合は、その被験者がだれなのか。そして、いつ、どのような方法で行ったのかを簡単にまとめます。スペースがあれば調査用紙なども掲載するとわかりやすくなります。



★今、できること★

まさしく、数学の世界です。それを解決するにはどんな方法を、どんな手順で、調査を行えばよいのかを、ふとした時間を利用して考えてみましょう。最近、「どんな実験をすればよいか、記述せよ」といった入試問題もみられるようになりました。

【調査結果】

調査や実験の結果を淡々と書きます。また先ほど設定したリサーチクエスションの答え(回答)を書きます。

【考察】

調査結果から読み取れることや、反省点、課題点を記述します。特に課題点を書くことは勇気がいりますが、その一方で、他の研究者にとっても有益な情報となります。

【結論】

自分なりに研究の結論を述べます。また繰り返しになりますが、「今後の課題」も盛り込み論文(研究)になります。今後、自分が取り組みたいことも書いてみましょう。

【引用文献・参考文献】

引用文献や参考文献一覧は、論文で一番大切なところ。本文で言及した文献はすべて盛り込みます。あなたの論文を読んだ人が、このリストをもとに、さらに研究を続けることもあります。この例では2ページの記事で7冊の文献を引用したことになります。



★今、できること★

まずは新書読書から！ 気になったページとその内容を簡単にメモしておきましょう。

探究学習の「今できること」のまとめ

1. 今、あなたが疑問を出そうと苦労している姿を、活動を通して、ワークシートに反映させましょう。

☞ 論文の「はじめに」を執筆する準備となります

2. 特に、考查後、行われる新書読書で、興味のある新書や、思い切った関連のない新書に挑戦してみましょう。

☞ その内容をメモし、該当ページも記録しましょう。「はじめに」と「参考文献」の準備となります。

3. 例えば数学の証明や、理科の実験レポートを意識的に見てみましょう。

☞ 「何を言え、何を証明したことになるか」といった点への意識を高めることで、論文の構成を考える基礎となります。